パネルディスカッション「中国医薬・鍼灸の自国化再考」
［研究発表2］

琢周と琢周流鍼術の虚像と実像

長野　仁
森ノ宮医療大学大学院 教授

I. パネルディスカッションの企図

吉田流という鍼術の流派の名前を初めて耳にしたのは平成元年（1989）であるが，このことが演者をして日本鍼灸史に向かわしめたといっても過言でない．九州国立博物館が同17年（2005）に開業して以来，ハラノムシ図鑑である『針聞書』の研究を一手に引き受けることとなったのも，元をたどれば吉田流が『蟲書』を「鍼口伝書」と位置づけていたからである．そして，出雲大社ゆかりの吉田一貞が『刺鍼家鑑集』に自序をしたためた寛文元年（1661）から，奇しくも360年の節目に当たる令和3年（2021）に，栄えある本学会の第122回会長を仰せつかることとなり，未開催の地でもあった島根こそ相応しい，斯様な思いから本大会を発起した次第である．

島根大会の実現までには，幾つかの伏線があった．第一に，演者（会長），大出都紀子氏（実行委員），森ノ宮医療学園はりきゅうミュージアム（後援）の元に，吉田流・匹地流・琢周流の新史料が断続的に舞い込んできたことである．これによって，鍼穴の名称・部位・主治症ならびに鍼穴図の比較研究が一気に進展した．

第二に，琢周「印可状」の断簡が，平安期の藤原佐理（944–998）の古筆裂と鑑定されて2点現存していることが，二松學舎大学・町泉寿郎教授から北里大学・小曽戸洋客員教授の経由でもたらされたことである．1点は熱海のMOA美術館の所蔵，1点は東京の古書肆の出品にかかるが，『大明琢周鍼法鈔』（1679序刊）下巻に置かれる「鍼法一軸跋」との比較によって，匹地喜庵による偽装工作が鮮明となった．

第三に，松江市名誉市民である名優の芦田伸介（1917～99）の生家が護持してきた芦田家文書が売り立てられ，演者はその一部分を東京の古書店から購入していたが，その大部分を松江歴史館（以下，歴史館と略称）が当地の文化財として京都の古書店から買い戻していたことである．今大会を機に，演者の入手分は歴史館へ寄贈し，全貌を損なうことなく後世に伝えられることとなったが，歴史館の所蔵分には吉田流の元となった琢周流の流儀書が大量に含まれていた．

第四に，現地の梶谷光弘氏（名誉会長）による綿密な現地調査が挙げられる．島根大学医学部特任教授の在任中に果たされた琢周の「肖像」「伝」の発見と，公益財団法人いづも財団事務局次長に転職してからの吉田家に関する杵築（出雲）大社史料の精査である．梶谷氏の二大業績によって，琢周の実在が確定的となり，吉田家の虚像と実像が浮彫りとなった．

パネルディスカッション「中国医薬・鍼灸の自国化再考」は，上記の伏線を回収するべく企画したわけだが，演者の分担する琢周および琢周流を事例とした鍼灸は，周縁の脇道（最も狭い範囲）に過ぎない．中心の本道（医薬学）については，帝京平成大学・鈴木達彦准教授に分担いただき，田代三喜を主題にご発表いただくが，島根大会の誘致と前後して松江歴史館に田代家伝来の薬師如来座像が寄贈されたのは，単なる偶然とは思われない．医学史の土台である日本史の広大な領域には，なかなか医史学者では辿り着くことのできない一次史料が眠っている．基調講演をご依頼した北海道大学・橋本雄教授には，『中華幻想』の刊行（勉誠出版2001）以後の新知見も盛り込んで「日本医学史のなかの中華幻想」

をアップグレードしていただくが，登壇が叶ったのは九博の研究員当時に『針聞書』を共同研究させていただいた奇縁による．座長は茨城大学・真柳誠名誉教授に快諾いただいた．しかし，録画のオンデマンド式配信のためアドリブでの討議ができないため．予め上記3題をご視聴のうえ総括していただくこととした．

II. 緒　言

琢周流をめぐる謎は，殊のほか深かった．演者は，吉田流と匹地流の先後関係を入れ替えたことで一件落着，本発表は拙稿の要約と新知見の追加で事足りると思っていたが，話はそう単純ではなかったのだ．近年の最大のトピックス，梶谷氏による「肖像」の発見は無条件にもろ手を挙げて喜ぶべきであるから，本大会のポスター・チラシにも掲載したわけである．でも，だからといって付帯の「伝」を丸ごと史実と認定してしまうのは，流儀書の序跋を鵜呑みに踊らされてきた過去の轍を踏む危険が伴うのでは？ かかる疑問が脳裏をよぎって筆がピタリと止まってしまい，会長にも拘らず入稿の締切りを過ぎてしまった！ しかし，是が非でも落すわけにはいかないので，謎解きの暫定版を入稿することとした．抄録の内容と発表の動画に齟齬があるとすれば，多少たりとも推理が進展したものとご理解いただければ幸いである．

III. 開祖と流派の虚像と実像

琢周を開祖に仰ぐ，本邦のみに興った鍼術の流派は，開祖の名前から琢周流，開祖の母国から大明流・大明一流，継承者の氏名から匹地流・喜庵流・喜庵一流・吉田流・一貞流，流伝した地域から出雲流（鍼灸界の口碑）などと呼ばれる．演者はかつて，琢周は架空の人物ではないかと疑ったこともあったが，梶谷氏が「肖像」を発見したからには，実在と来日に関しては史実と認定した上で議論を進めていくのが筋というものである．しかし，琢周流に属する鍼立たちが，琢周の人物像にいったい何を求め，それを何で求めたのかについては，深掘り，深読みせねばなるまい．

琢周の「肖像」は，島根大学附属図書館所蔵の『誠斎雑稿合綴』に収録されているが，付帯の「伝」には斯様にある（演者訓読）．

> 「伝」に云く，琢周は明人なり．少くして聡敏，尤も鍼術を善くす．夢に異人と遇ひ，秦越人・扁鵲の鍼法を受け，而して術の益ます進むに因て以為｛おもへ｝らく，「独りに与へて之を守らん，寧｛むし｝ろ衆もろに与へて之を俱にす」と．
>
> 時に明国定まらず，終に万暦二十三年（1595）乙未の春，吾が朝に来たりて肥の崎嶐（長崎）に住む．近隣の患者，其の芳名を聞き，来たりて治を乞う者，門前に市を成し，一たび治術を施せば，則ち輿に入る者歩き出し，扶けに至る者独り還り，衆もろ甚だ奇と為す．惜しひ哉，幾ばくせず，痢を患ひて遂に殞（死）す．
>
> 是を以て未だ述作の書有らず，之を以て後代に伝ふべき者，僅か口授を以て伝ふのみ．其の至微の若きは，口に言ふべからずと雖も，然れど補瀉壓按は皆な『難経』の意と同じうし，実に越人の鍼法と謂ひつべし．其の門に入り，其の訣を受くる者，僅か両三人，南紀熊野人・某，出雲之人・匹地垚庵，馬木理庵，及び籠波呂真，等なり．今に伝はる所の書，皆な門人の筆記する所の者にして，其の余流を汲む者，甚だ罕（稀）なり．故に，吾が朝に於ひては顕然と其の名を発せず，今僅かに其の遺像を図し，以て朽ちずに伝ふと云ふ．
>
> 時に慶応元年（1865）乙丑九月日，門人・大村玄珉の需めに応じ，小篠恭，誌す．

梶谷氏によれば，編者の小篠恭（1824～1903）は，幼名を弥五郎，通称を昌榮，名を恭，字を君基，

号を静好，静好斎，誠斎，晩号を知岱斎といい，松江藩御番方並唐船番御用旅役の石川助九郎と松江城下の末次町で鍼医を営んでいた小篠昌碩の長女・麻喜との長男である（「松江藩における賀川流産科の移入とその影響について―鍼医から産科医をめざした小篠昌榮の学問・医学修行を通じて―」，『古代文化研究』18 号，35～64 頁，2010.03）．したがって，琢周の「肖像」と「伝」は祖父の昌碩から受け継がれてきたものと解される．

要点をかいつまめば，①中国全土が世情不安で，琢周は一派を形成できなかった．②新天地を求めて来日したが，ほどなく病没したので日本の門弟も数人に止まり，“タクシュウ”ブランドも地域限定で全国区には至らなかった．③自著を撰じなかったので，全ての現存書は日本人の口述筆記である．裏を返せば，琢周流は日本の一部の地域に数人の継承者しかいない，中国本土には全く伝播しなかった本場中国の激レアな鍼術であるから，今すぐ継承者の元に馳せ参じて口述筆記を授かるべきだ，と宣伝しているわけである．

ここで琢周は，鍼の名手として語られているが，明国内では超マイナーな“山人”であったように思われる．鶴見大学・金文京教授（京大名誉教授）によれば，“山人”とは「今日風にいえばある種の文化人の一群」で「社会に横行し，さまざま物議をかもした」「無能有害な輩」の総称である（「明代万暦年間の山人の活動」，『東洋史研究』61 巻 2 号，257～277 頁，2002.9）．卑近な喩えをするなら，日本では凄く有名でも自国では全く無名な，可もなく不可もない容貌のタレント，たかが知れた実力のスポーツ選手のような存在である．琢周が実際に心得ていた医術は，恐らく『大明琢周先生外科・口舌之部』（東大総合図書館蔵）のような薬主鍼従の外科だったろう．該書は，“青筋”や“痧病”への関心の高さから龔廷賢の医書が流行した 17 世紀初頭の成立と目され，調口散・除痧散・凡姜丹（二聖丸）・潤栄散・愈孔丹・七味丁香円・吐涎丹の「七方」を核心としている．鍼術も散見するが，舌や喉へ直に施すものばかりで，患部から血を取る場合が多く，体表の鍼穴は所出しない．

演者は「肖像」の原図と「伝」の原文の出所は，『大明琢周鍼法伝書』（採色絵図入り巻子本：はりきゅうミュージアム蔵）にだけ登場する土江卜庵ではないかと認識している．匹地喜庵（祖父）→土江卜庵（高弟かつ親族？）→福田道折（孫）という師承関係で，道折が『大明琢周鍼法一軸・鍼法鈔』（全 3 巻：京大富士川文庫蔵）を延宝 7 年（1679）に公刊した際には，匹地→土江→福田と氏が 3 連続で異れば，自らの正統性を失墜させるとの懸念から，意図的に隠蔽されたものと解される．

『鍼法鈔』下巻の「琢周鍼法鈔跋」は無記名だが，「伝」の筋書きを肉付けした内容となっているので，情報ソースは卜庵に由来するとみてよかろう．ただし，終盤の「度々板に開かんことを望みて剞劂氏下るといへども，難（固）く秘して猶ほ出ださず．予（道折）今思ふに，医は仁道なり．板に開きて此の鍼法を用ゆれば，天下の民を救はん．然らば大ひなる功ならん，となり」のくだりは，出版の決意表明を道折が後から付け足した部分である．

かねてより「琢周鍼法鈔跋」によって，琢周は万暦 20 年（壬辰＝文禄元年：1592）の秋までは明国内に居り，慶長年中（1596～1615）に長崎で活躍し，ほどなく痢病で歿したことは知られていたが，「伝」の出現によって，来日が万暦二十三年（乙未：1595）の春であることが判明した．

ところで，琢周の名が初めて登場するのは，意外にも馬木理庵の流儀書であって，匹地喜庵のそれではない．『琢周伝書』（はりきゅうミュージアム蔵）は元和 4 年（1618）成立で，「雲州大社之住，馬木理庵伝」とあるから，該書は驚くことに琢周と出雲を結びつけた初めての流儀書でもあるのだ．

そもそも，匹地喜庵が初めて登場する流儀書は『新刺秘伝鍼書』上下巻（はりきゅうミュージアム蔵）であるが，慶安 4 年（1651）まで下ってしまう．疋地垈庵→渡辺吉右衛門尉→木村清吉と三伝しているので，再伝は寛永頃（1624～45）に遡るだろうが，それでも不思議なことに該書には琢周の名が見られないのである．上巻の穴法は『琢周伝書』の異名同書なのにもかかわらず，下巻の療法は腹部

が主体の無分流の系統に属する．このように，流儀書が複数巻におよぶ場合には，伝承者の修得のプロセスが地層のように反映されている場合が多い．となれば，喜庵は無分流の別流と琢周流の原流をあい前後して修めていたことになる．

では，喜庵に無分流を伝授したのはいったい誰か．演者は「伝」に登場する籠波呂真であると踏んでいる．「伝」は琢周の門人を「僅か両三人」といいつつ，実際には4名を挙げているのは，南紀熊野人・某と籠波呂真とが同一人物で，重複しているためだと睨んでいる．恐らく，卜庵は『大明琢周叟家伝図法師』（仮題，演者蔵）と同様の奥書を持つ彩色巻子本を所持していたのであろう．ここでは，①籠波呂真，②疋地喜菴，③馬木理庵の順で，あたかも琢周門下の三傑であるかのような表記がなされている．喜庵は松江藩医（後述），理庵は「雲州大社之住」なので二人とも「出雲之人」に相違ない．卜庵は呂真の出自（住処）を知っていたろうが，志願者が熊野（実は大坂，後述）へ流れてしまっては元も子もない．『大明琢周叟家伝図法師』では，①呂真，②喜庵，③理庵であったが，「伝」では序｛つい｝でのように「及，籠波呂真」と付け足し，①喜庵，②理庵，③呂真の順に入れ替えてある．これは，呂真に期待が集まらないよう，故意に最下位へ格下げしたとしか思われない．けれども，あえて除外しなかったのは，呂真への入門志望者を誘い込むため（我々のほうが上位）と，呂真の別の門人（すなわち同門）からの批判を躱すためと考えるべきだろう．

さらに演者は，籠波呂真は白土（仙刻・仙谷院）路針と同一人物であると推察している．『無分一伝書』（1636成：無窮会神習文庫蔵）には，無分→什可→仙刻路針という師承関係が示されている．新出の『鍼灸経穴図解』（仮題，北里大学白金図書館蔵）は巻子の図法師で，慶長15年（1610）に大坂の露針斎が越中の川井五衛門に授けたもの．奥書の「露針斎」の右肩には小字で「大坂」と明記されているのに，卜庵はなぜロシンを熊野の住人と見なしたのであろうか．最大の理由は，熊野は出雲と並ぶ神々の聖地であって，商都の大坂よりも霊験のあらたかさが上回るからだろうが，故意的な誤記に根拠を与える史料が出現した．

新出の『針術秘巻』（大浦宏勝氏蔵）は路針流の巻子の由緒書で，慶長14年（1609）に白土路針（吉永）が本嶋弥左衛門に授けたもの．本文には「熊野三社権現祝故ニ是三社之内神ニ納置候．亦，針ニて百一病治トシテ是ヲ開用也．又，日本ニても熊野権現ヨリ土王へ有御伝授．故ニ針ト云事ありトテ，内裏ヨリ竹田の家ヲ針之根本ト被成御定．針の大事は竹田の自家伝也」，起請文には「針根本，熊野三社大権現御罰ヲ可蒙者也」とあるので，ロシンを熊野の住人と強弁することが可能だったわけである．なお，竹田家をめぐる“中華幻想”については橋本教授の講演を参照されたい．

梶谷氏の調査によれば，匹地喜庵は150石で堀尾忠晴（1596～1633）に仕える藩医であった（「御給帳からみた松江藩の藩医」，『古代文化研究』11号，39～62頁，2003.03）．忠晴の没後，藩主が京極忠高（1593～1637）に易わった途端，喜庵は御給帳から姿を消しているので，寛永11年（1634）以後の再任は果たせなかったとみてよい．そして，公的身分の代替となる権威と収入源を確保するべく担ぎ上げたのが，大明帝国と明人琢周だったと考えてよかろう．

演者が思うに，匹地喜庵と馬木理庵は呂真門下の同輩（盟友）で，二人の一体感からすれば兄弟か従兄弟であっても不思議でない．かたや松江藩，かたや杵築大社の威厳によって集客（門人と患者）していた．馬木｛まき｝は大社の南東十数キロの地名で，日本三大不動として有名な馬木不動尊（光明寺）ばかりか熊野神社もある地域である．理庵のいう「雲州大社之住」は，実際には大社の近隣の住人といった意味合いのはずだが，読者のポジティブなミスリードを誘発して大社の一員（上手く運べば神職）と思い込ませるべく，あえて表記をぼやかしているとしか思われない．福田道折が，松江藩の列士録や御給帳に著録されない民間医なのに，「雲陽城住」と記しているのも同様である．しかも，理庵が琢周と大社を持ち出したのは，喜庵が失職する15年も前（1633→1618）からで，集客には藩医とは違った絶

大な権威が必要だったのであろう．

次世代の土江卜庵であるが，琢周の伝記（作り話）の任務を負ったのだとすれば，喜庵の単なる門人のはずがなく，養子に出された実弟か，実弟の甥か，妻方の甥か，はたまた娘婿か，いづれにせよ縁者とみるのが自然である．喜庵・理庵・卜庵は 3 人で結託し，いわゆる経歴詐称に手を染め，琢周の直伝を証明するべく捏造したのが前述の「印可状」ということになる．「印可状」が琢周の綴った文章と認めがたいのは，大陸からの渡来人が日本のことを“本朝”と記し，自らの鍼術を“明伝”と称している点である．そもそも，中国本土における医学の伝授において，師弟間で「印可状」を授受する慣例があったのかも，甚だ疑問である．ともあれ，江戸期に古筆裂と鑑定されているほどだから，よほどの能筆に揮毫を依頼したのだろう．

卜庵がしたためた「伝」から「琢周鍼法鈔跋」へ，それらを踏まえた福田道折の「大明琢周鍼法鈔序」へと時代が下るに連れ，エピソードが盛られていく．注目すべきは，琢周の師が夢想の異人から実在の法鵲主翁へと現実味が増している点，匹地喜庵の長崎行きが「国命」すなわち堀尾忠晴の命令による公費留学であったことを強調している点である．理庵の『琢周伝書』の奥書も「右一流者，琢周所得夢中針術也」なので，「伝」が旧バージョンであることを傍証している．大名の堀尾家は忠晴の代で途絶えたので，「国命」か否かは確かめようがない．

匹地喜庵・馬木理庵・土江卜庵の偽装工作の上に，吉田一貞がマウント・ポジションを取るべくさらなる「加上」を仕掛けたのだから，いよいよ話が混乱するわけだ．『刺鍼家鑑集』の一貞序（1661）によれば，祖父の意休は琢周の来日前に渡明して 7 年間も師事したとする（『皇国名医伝』は渡航を永禄とするが，文禄の誤写だろう）．しかも，国内では知りえなかった崔林杏という師の本名まで開陳する周到ぶりである．今でいえば，芸能人の本名を知っているだけでツウぶれるのに近かろう．

該書のほか『経絡考義』『大明鍼家琢周伝（禁穴目録）』『蟲書（鍼口伝書）』（いずれも杏雨書屋蔵）の巻頭には，「雲州大社 鍼家 吉田意休 艸稿／嗣子 吉田喜安 増補／家孫 吉田一貞 続攷」とあるが，どこにも神職とは書いていない．宇津木昆台が『日本医譜』（1843 自序）に『垣根草』（都賀庭鐘か？ 1770 初刊）の記述として「中古雲州，有吉田意休者，元為社司，入唐究鍼術之妙，再興将廃絶之鍼術於我邦」を引き，これを富士川游が『日本医学史』（1904 初版）で「吉田意休，出雲大社ノ祝ナリ」と言い換えたため，我々は長らく神職（しかも高位の）と刷り込まされる羽目となった．

梶谷氏は江戸後期以来の呪縛にも果敢に切り込まれ，北島家文書「國造北島氏支配屋敷目録」の「天正十九年（1591）十二月十七日」の杵築町越峠（こえど）の「意休」が「面九間 入卅一間」という広大な敷地に住んでいたことを突き止め，加えて広島大学附属図書館所蔵「中国五県土地・租税資料文庫」所収の「寛永弐年（1625）杵築御検地帳　丑卯月五日」に「喜庵」を見出し，両名とも例外的な号による表記であるから医師と認められるとした．さらに，両名は「御供宿」の権益をもつ神職吉田家の分家と見なされたが，両名が神職か否かは定かではないとし，屋敷は寛永 2 年（1625）に孫六と彦六という人物が管理しているので，すでに喜庵は転居していたと考察された（「吉田流鍼灸の祖吉田意休・嫡子喜安の実像と虚像」，『医譚』復刊 108 号，89～100 頁，2018.12）．地道な調査によって，意休と喜庵は実在したものの，日明関係などの状況証拠を積み重ね，両名が鍼立たりえなかったことを論証された．演者が指摘してきたように，一貞の「加上」行為は功を奏して福井藩医の公職に就き，江戸に召されて 4 代将軍・家綱（在任：1651～80）に鍼を立てるにまで登り詰めたのである（『徳川実記』）．

IV．流儀の虚像と実像

匹地流と吉田流の最大の相違は，鍼穴の穴数と名称に求められる．前者は全 105 穴で十四経穴の中に特異な穴名が混在している，京都大学・武田時昌名誉教授のご教示によれば，1×3×5×7＝105 がコンセ

プトであるという．後者が114穴で，全てが特異な穴名となっている．数学的思考を援用すると，1桁目が7の素数の足し算，17+97，47+67，57+57あたりがコンセプトかも知れない．特に，素数57は曲直瀬道三の『切紙』の条数であるし，その影響下に編まれた扁鵲流の流儀書の条数でもあるのだ．

演者は，吉田流が先発で匹地流が後発という通説を，腹部三脘穴（肝・心・脾・肺・腎・命門×上脘・中脘・下脘＝全18穴）の形成過程から異議を唱えて逆転させた（「吉田流は16世紀の流派とは認めがたい―日本独自の腹部三脘穴からの考察―」，本誌61巻1号，85頁，2014.03）．また，吉田流のそれは，左・右の寸・関・尺の浮・中・沈（2×3×3=18）の診脈部位を投影した構造となっていることに気づいた20数年前から，脈診と連動した腹部三脘穴による腹診が行われていたのではないかと密かに期待を寄せていた．しかし，芦田家文書の『大明琢周腹診伝一軸』が，脾募・肺先……という無分流系の腹診だったので頗る落胆した．腹部三脘穴は，最初から理論倒れだったことが決定的となったからである．

ところで，夾雑な105穴を純潔な114穴に改訂したその人こそ，吉田一貞であった（『一貞流刺鍼腧穴要訣』，筆者蔵）．一貞は，大社にほど近い馬木に住む理庵に入門して105穴を修め，独立後に『堀内随流軒都総書（くにふさ）』（1703精写，藤本蓮風氏蔵）の元となった彩色の図法師と五臓図を持つ105穴の巻子本を，114穴の『大明琢周叟家伝図法師』へと換骨奪胎し，しかも馬木理庵の所伝であると偽装した．その後，杵築町越峠に住む父と元松江藩医のヒキチ（匹地・疋地）氏が，偶然に二人ともキアン（喜庵・𠮟庵・喜安）と号していたことに託（かこつ）け，祖父・意休の渡明をでっち上げたというシナリオになる．

仮に，一貞は理庵の実子で，吉田家の入り婿となった，つまり吉田喜安の養子となったというのであれば，また話は変わってくる．梶谷氏によれば，吉田喜安は寛永2年（1625）に杵築大社から転出していて，匹地喜庵は寛永10年（1633）まで松江藩に仕えていた．2件の古記録を繋ぎ合わせれば，二人のキアンを同一人物とみることも可能であるし，そもそも大坂（熊野）の露針（呂真）流を学んでいたとなれば，日明関係も考慮する必要もなくなる．二人のキアンの同一人説と別人説は，会期までに考証を深める所存である．

ともあれ，吉田一貞は，全114穴が異名の鍼穴体系を構築する一方で，純然たる十四経説の『経絡考義』も著している．福井藩と江戸幕府の登城には，医師の共通認識としての十四経が必須だったに違いない．とはいえ，両者の整合性を図ろうとした形跡はなく，私と公をダブル・スタンダードで並存させていた．これは，無自覚な混在とは真逆に，オリジナリティ（家伝口授）を縦軸に自家の厳粛性をアピールし，オーソドキシー（中国医学）を横軸に医師としての素養を認知させる，高度な演出を効かせているのである．

ヒキチ側はヒキチ側で，「伝」を「琢周鍼法抄跋」に敷衍するにあたって，「琢周ハ，九鍼ノ中ノ円利針ヲ用ユ」とした．裁縫のマチ針のような形状から，円利鍼は和俗に露鍼（つゆばり）や玉鍼（たまばり）と呼ばれていた．籠波呂真は大坂で露針斎を名乗っていたが，文字通り露鍼の使い手だったわけで，ロシンの特技すらタクシュウに投影していたことになる．

V．琢周流の存在意義 ～否定からの肯定～

大学3年の秋から30年間以上も真相を追い求めた挙句，内情を暴露し続ける結果なり，我ながら辟易としてしまった．105穴系にせよ114穴系にせよ，何らかの肯定的要素（臨床的意義）はないのだろうか．

吉田流として伝承された114穴系の鍼穴は，名称が特異なだけでなく，そのほとんどが通常の十四経の穴位から5分から2寸の範囲でずらしてある．いわば，オール“私方穴”化である．その理由についてはどこにも明記されていないが，稲葉美濃守（正則：1623～96，第2代小田原藩主）の鍼医・青山光

悦所伝の『鉄鍼新書』（小曽戸洋先生→演者蔵）に，示唆に富んだ注意書きがみられたので紹介したい．書名に鉄鍼（鈹鍼・刃鍼）とあるが刺絡文献ではなく，広信流という流派の鍼術書である．演者が瞠目したのは，「章門・三里等ノ穴ハ，灸ノ痕アリ．灸痕ヘ針スル〒ヲ忌ム．章門・三里等ハ，灸痕ヲ除キ刺スシ．故ニ予（光悦→某良安→良安息→広信）ハ三里ノ穴ニハ針セス〆，三里ヨリ一寸下～条口ノ穴ヲ刺ス」という口訣である．日・中・韓・日を問わず，大概の鍼灸書はどの穴に対しても，禁鍼・禁灸でない限り鍼幾分・灸何壮と併記されている．宣教師のルイス・フロイスが『日欧文化比較』（1585 成）で指摘するように，日本人の体は灸痕だらけだったので，重要な穴の多くがすでにケロイド化していたわけである．新興の鍼術で流派を興した鍼立にとっては，灸痕は刺鍼の効能を低減させる邪魔物に過ぎない．そこで規程の穴位から少し外れた所に鍼穴を設定しなおし，別名を付与したというのであれば，スタートが自利的な「加上」行為や隠蔽・偽装工作だったにせよ，ゴールは利他的な鍼穴創出を達成したことになる．

してみれば，太くて固い（撓らない）円利鍼の推奨は，鍼穴に灸痕があった場合に硬化したケロイドを易々と貫通して指定の深度まで鍼尖を到達させるためだった，とも言えはしまいか．もしそうであるならば，演者は臨床的な合理性を認めたい．伝統医学の担い手である鍼灸師にとって，医史学は過去の探求によって未来を構築していく大前提の学問である．今後，琢周流に含まれている虚偽から出た真実については，是々非々で再評価していくことが急務と考えている．